

〈資 料〉

茨川村境界確定万代記録

牛 尾 洋 也

茨川村境界確定万代記録

牛 尾 洋 也

○ 解説

本文書は、滋賀県東近江市茨川に存在した旧永源寺町茨川村（1965（昭和40年）には実質的に廃村となる）において、1874（明治7）年5月27日に分村・改称して茨川村となった経緯に関する村の古文書¹の翻刻を行ったものである。

本文書は、1872（明治5）年2月24日に明治政府が発出した郡村地券に関する「地券渡方規則」、及び同年8月に滋賀県の「地券取調方取扱心得方凡例書」が示され、それを受けて、当時、愛知郡第一区の六か村（畑）の枝郷として位置づけられていた「茨川茶屋（村）」の人々がその内容に驚き、村としての領域（テリトリー）の確認を求め県庁（当初は犬上県庁、後に滋賀県庁）に出した明治5年の「願書」を中心として、県庁とのやり取り及び郷中六か村との交渉をまとめ、最終的には村名の改称（分村）に至った「茨川村」の分村設立の経緯を村の「万代記録」として残すべく綴った袋綴じの冊子本（見開き1頁として36頁からなる）である（明治24年2月上旬の日付がある。前年の1890（明治23）年5月には、府県制・郡制が制定されており、本文書がまとめられた動機については、改めて検討

1 茨川村出身の筒井正氏（名古屋商科大学・非常勤講師）のご依頼で、茨川村の絵図をデジタル化し原寸大を和紙印刷した際に、筒井氏から託されたものであり、茨川を含む東近江市永源寺地区の地券取調総絵図や地籍図等の発掘に伴い翻刻を行ったものである。

したい。)

それは、以下の10件の内容から成る。

- ①表紙：「明治六年癸酉第一月吉日 当村内地境界相定ニ付万代記録」。
- ②見開き：「諸願成就村中繁栄之基礎与一汙謹で奉賀」と書かれた明治6年1月1日付の見出し（2頁）。
- ③「愛知郡第一区茨川茶屋村」の戸長、副戸長、惣代をはじめ村民14名の署名による県庁への「願面」の「差出経緯の概要」（3頁1行目～5頁4行目）。
- ④地券取調において「字八田茨川内山内の流水三里、横幅二十町」につき、茨川茶屋（村）の領内と定めていただくよう理由を添えた犬上県庁への「願面」（明治5年8月20日付）（5頁5行目～8頁末）。
- ⑤犬上県庁の「願面預り置き」処遇を受け郷中六か村との話し合いを経た「再願面提出のための下書き」（9頁1行目～12頁12行目）。
- ⑥犬上県庁への「再願面の清書」（明治5年9月28日付）（12頁13行目～15頁11行目）。
- ⑦願面の趣旨に関する犬上県庁と茨川村との「問答」並びに郷中村々との「交渉経緯」（15頁12行目～28頁17行目）。
- ⑧茨川茶屋村と郷中六ヶ村との立会山の「境界取替一札之件」（明治5年11月29日付）（28頁18行目～30頁19行目）。
- ⑨「茨川茶屋の分村願書」並びに茨川村の周囲の境界を確定した内容を記す「境界約定取替一札事」（明治6年1月4日付）（30頁20行目～34頁末）。
- ⑩滋賀県令松田道之への「分村願」並びに同県令より「茨川村」への改称（分村）の許可書（明治7年5月27日付）。

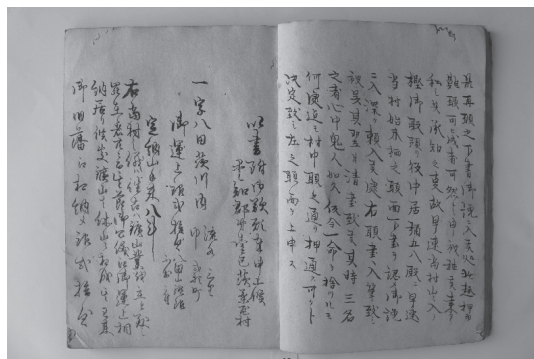
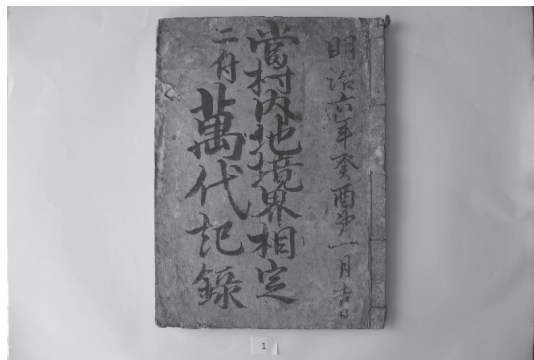
本文書は、枝村と位置付けられていた村が地券交付・地租改正にあたり分村独立した輝かしい経緯を生き生きと物語るだけでなく、今日、限界集（龍法 '25）57-4, 512（1158）

落化が進む日本の中山間地域の土地所有権並びに境界の持つ意味を考える上で貴重な史料であると考ええる。

本文書については不明の箇所もあり、他の関連文書との突合せなどにより内容の一層の解明が必要となるが、一旦ここに翻刻を公表し、諸賢からのご意見をお聞きする次第である。

なお、本資料の具体的な内容検討およびその位置づけについては、牛尾洋也編『土地空間の近代法的把握—地域資源管理をめぐって—』（日本評論社、2025年）第11章「明治初期の分村の経緯と村の領域確定」を併せて参照いただきたい。

（下記、原本の一部）



(翻刻)²

「明治六年癸酉（みずのととり）第一月吉日 ①

当村内地境界相定ニ付万代記録」

諸願成就村中 ②

繁栄之基礎

与一汙謹で

奉賀

愛知郡第一区茨川茶屋村 ③

戸長 石井 勝太郎

副戸長 小椋 儀平

惣代 筒井 龍藏

筒井 利平

筒井利三郎

小椋 重信

石井清五郎

八木 源藏

小椋 久藏

茲出 寿治

小椋 など

筒井 小平

筒井 庄藏

阿部 忠藏

2 数字でページ数を示す。

王政御一新以来明治六癸酉年地券発行
 ニ付国内町村地方詳細取調可差出之旨
 被仰渡ニ付同年八月区長被召出犬上県
 ニ於テ権令神山郡廉殿ヨリ被仰出候御
 趣意其区村々地方取調田畑山林屋敷野藪
 式入会地弁別致し村々持之場所取調画図
 面ニ委敷認メ可差出旨被仰渡ニ付両区長婦村
 之上区内エ被致通達右ニ付当村之儀従前立
 会山ト有之場所相持（居リ候ニ付郷内八月十八日
 箕川村ニ而集会之上評定被致最モ麦野之
 河内之儀者郷中六ヶ村ヨリ年々四拾壹石三斗
 御小物成地ニ罷有候處尚又茨茶屋儀
 元禄年中ヨリ定納八斗ニ而田畠開發致
 罷有候場所ニ有之今般王政御規則ニハ
 立会場所者夫々村毎ニ割付致シ村毎之
 画図面ニ組込可差出規則ニ候間不残
 立会山割附可致ト相談相究メ当村
 戸長ヲ呼寄右ノ趣申被渡候ニ付当村
 戸長茂当惑致シ其儘婦村仕村中
 一戸右ノ趣申渡シ候処一戸之者甚ダ
 心配仕取々ニ申立候得共天朝一般ノ御
 規則ト有之候ニ付無捩仕合ニ存候左候ヘ共
 往古ヨリ御運上御年貢上納仕是迄右
 之場所手広く相稼来リ右ニ而村中相統
 罷在候地所ニ而外ニ山内同様之取計
 ニ而ハ承服難成与ぞんじ夫ヨリ村中評
 議之上利平利三郎龍藏右三人之者ヲ

④

相頼ミ候ニ付無拋三人之者引受候上当
村始末柄委敷願面ニ認メ戸長代筒井利平
副戸長代筒井利三郎惣代筒井龍藏ハ
八月十六日彦根表エ罷出中組岡田彌
吉方へ願面相見セ清書仕同廿日願面
県庁へ差出申候願面ニ 印ス

⑤

以書付ヲ御嘆願奉申上候

愛知郡第一区茨茶屋村

君ヶ畑村箕川村蛭谷村 立会

政所村黄和田村九居瀬村

一 字八田茨川内山内 流水三里
横幅二十町

此山手銀貳拾匁宛古来ヨリ上納仕来り候

元禄七戌年六ヶ畑立会場所開キ正米八斗上納仕来り候

右当村之儀ハ山中極難村ニ付重々山稼炭焼並ニ
中古石灰炭等相揃へ右ニテ露命細々ニ茂取続
仕来り罷在シ處先年旧藩御支配中ニ於テ
村方難渋未レ始御憐察被成下格別之思召ヲ
以テ新田開発御赦免被成下右ニ付而ハ多分御
拝借御蔭ヲ以テ成就仕村中一汙難有奉存候
去ナガラ元来冷氣之場所殊ニ新田之儀ニ付
当時ニ而ハ思話敷取上米モ出来無之ニ付立会

⑦

自儘相持候而茂前引ニ相成リ甚タ難渋難
 堪仕合ニ御座候然ル処今般地券御調へ
 並真結リ書可奉差上旨被御渡ニ付六ヶ畑
 立会等御座候ニ付戸副長之者ヨリ被仰
 渡之御趣意区内通達之上則チ六カ村
 立会山之儀割付可致由被申聞左候得バ
 当村之儀ハ従前立会山而已相持来リシ
 處前件山内村毎ニ割附被相成候而ハ
 如何程之排場茂無之候ニ付忽至難
 渋ニ相成リ尚亦其上当時仕入場所即立
 ニ相成候而ハ即今小前之者共糾命仕ベ
 候之儀者眼前ニ罷有候間役人之者真ニ以テ
 心痛仕候而茂是迄同様儀ニ付如何可
 致ト愚考迺茂無之嘆ケカハ敷仕合ニ奉存候
 且ハ右山内ノ義当村居住致シ罷在候地面ニ
 有シ処尚亦前件ノ通り山ニ御運上開キ地ニ
 御年貢討論ヨリ直ニ御上納仕旧藩御
 支配中ニ一村ニ取立らしい置則御下ケ書
 等茂頂戴仕罷者候最モ前件立会ノ
 村方ヨリ御年貢御運上上納致罷在シ村方
 茂無之ニ候得バ外ニ山内同様共相難心得
 然ル處先達而村中往々相続為方筋等
 有之候得バ何成共植付可致様被御渡ニ付
 村中相談之上第一杉檜桑等植付並ニ
 油実だま³ 柏辺ベ白木雜木等茂茺立

⑧

3 油実：菜種油など、卯木うつぎ

右ニ而村中往々法方相付候哉ト相心得
候処前書申上奉り候通り当時ニ而者
見込通り可致地面見立申ニ付深く心痛
仕誠ニ御維新已来御改正被仰出候
御儀ニも御座候間前件山之内ニ而当村ヲ
始メ奥江式拾町下モエ式拾町ガ間イ右丁数
御憐愍ヲ以テ当村領内ト相定メ被下置候
得者納々ニ茂相続可相成何分立会山戸
副長ヨリ被仰渡之割付ニ而ハ村中喰続方
難相成ニ付只管右願之通り御聴届ケ
被成下置候得ハ村中一戸難有仕合ニ奉存候此段
以書付ヲ御難願奉申上候以上

明治五年壬申八月廿日

右村九番屋敷農

犬上県御庁

戸長 石井勝太郎

式番屋敷農

副戸長 小椋儀平

拾番屋敷農

総代 筒井龍蔵

県庁ニ於テ右願書被見之上被仰仕候儀ハ全ク
可様之場所ヲ割付ヲ致シ当壺村迷惑ニ相成
候様之儀者達シ不申候与被仰付尚俣
此度其村方ヨリ差出シ候願面地所取
極メニ預リ度次第最モ事に候得共当時地
券取調ニ付混雜致シ居り候間此儀ハ追而

⑨

願出べく様申渡則此願面区長方々下
 渡ス様申され候ニ付乍恐申上候此度私共
 願之通り御聞済ニ相成候得バ何れエ願書
 御下ケニ相成候共不苦候得左茂無之而ハ
 区長ト者乍申此度ニハ相手方同心之者ニ候
 間願面此度御聞入難相成候得ハ私シ
 共エ御下ケ可被降ト申上候処県庁ヨリ被
 仰聴候者此願面之趣ヲ以テ区長之者へ
 申付方有之候間先当県預リ置候由被申
 渡候ニ付其俣同廿六日ニ帰村仕候処郷
 中之者当村嘆願仕候ハ不案内ニ付亦候
 君ヶ畑村へ集会ヲ致シ候上郷中役人共口ヲ揃
 此度集会致シ候儀ハ余之儀ニあらざる早
 速入会山割付不致而ハ難相成ニ付集会致シ
 候間乍併ら右之山内茨茶屋儀ハ夫々田畑開
 発之地所茂有之ニ付六ツ割ニ可致ト相談
 相極リ候得共左候得ハ其村方茂難決ト
 相心得候間七ヶ村割ニ致すべく候間
 是迄下郷小物成四拾壺石三斗上納ノ
 分七ヶ村割付ニ而上納可致旨申渡シ候間
 当村戸長申聴候ニハ私シ村方儀ハ往古々
 御年貢御運上々納仕奉リ右ニ而彼山内
 相稼居リ候得共夫迄茂難決難凌仕合
 ニ候間此度右山内村毎ニ割付ニ相成
 候而者辻茂一村難立行亡消可仕儀者眼
 前ニ御座候間右之趣預テ御難願申置
 候間此度集会御評定ニ而被仰聴候儀

⑩

一切承知得不仕候間左様思召可被下候
与申合候処郷中役人案外之儀当惑赤
面与相見エ夫ニ而其場退座仕其后何之
沙汰無之ニ付村中打寄彼是ト心配仕候
處此度御維新御改正之折柄ニ地所
境界相不立候而ハ是迄数百年ノ来ノ
苦心悉皆反古ト相成候儀嘆ケ敷次第ト頭
分之者深く心配仕何卒先願申上候通り
流水四拾町幅貳拾町ノ間数相改再願可仕ト
決心ヲ究メ願面認メ前頭件三名ノ者九月
廿四日出庁可仕迎郡惣代岸善平氏方迄
罷越候処折節善平殿出庁致被居留主
中ニ而舍弟源十郎殿エ委細相尋ネ候処
源十郎被申候ニハ其御村方出庁被致候
節一応対面仕種々御噺シ申度儀有之
趣申置候間其御心組ニテ出庁可被致ト
申被聞候ニ付同廿五日彦根表着廿六日
早朝上ミ町大丸屋ニ止宿岸善平殿
相尋ネニ参リ対面致シ右岸善平殿ヨリ
申上難候ニハ此度県庁ノ思召ハ双方共
成丈ケ合併為致候様之御規則ニ有之
候間其村方ハ親郷政所村ノ付属為致
地券取調べ画図面共政所村与一紙ニシテ
差可為出旨申被居候間内々通達可
申候此度一大事之場所ニ候間情々勘考
致シ難願可仕ガ可仕ト申被聴候最モ
県再願ノ下書御覽ニ入候処此趣押而

⑪

⑫

難願可被成者可然与申被聴候素ヨリ
私シ共承知之事故早速当村出入ノ
櫓御殿預り役中居弥五八殿エ早速
当村始末柄願面下書ヲ認メ御覧
ニ入深ク頼入候処右願書へ入筆致シ
被呉其翌日清書致候其時三名
之者心中鬼人如久仮令一命ヲ捨ツルモ
何處迄モ村中願之通り押通ス可クト
決定致シ左之願面ヲ上申ス

以書附御願奉申上候

愛知郡第壹区茨茶屋村

一 字八田茨川内 流水三里

巾 廿拾町

御運上銀貳拾匁八田鉾銀

不出ニ付

定納山手米八斗

右当村之儀ハ往古ハ鉾山業を業と致シ
罷在候者共ニ而其節御公儀江御運上相
納居り処鉾山業者休山ニ相成其已来
御旧藩江相納メ銀貳拾匁
之御運上ニ而右之地所手広く山持
罷有候へ共いつ者なく追年貧窮仕亡
消ニも可及場ニ至り所持不行届ニ相成
ニ付下郷中与り追々地内江被立込自然

⑬

ト立木無数ニ相成漸く元禄年中
 ニ至り一同相励み難願仕米八斗上納
 之上所々開發山稼相兼耕作茂仕
 罷在候処度々火災も有之亦倍困窮
 に落入其日之渡世ニ当惑仕御領主御
 役場迄も罷出兼宝曆年間政所村
 手次相頼ミ御年貢迄も上納仕候之儀
 ニ及ヒ候へ共御領主様之御蔭ヲ以て御百姓
 相続仕其後追々成立候儀ハ全く御引
 立を蒙り候故之儀与難有承知仕就而ハ
 大切之御年貢政所村与リ上納仕候筈
 之様に相成右様他村之手次を以て
 上納罷在候儀ハ御国恩ヲ忘却之基
 与心付深く奉恐入付以前之通り
 諸事当村御役場へ罷出御年貢も
 直納仕度郷中茂申談した処尤之
 儀ニ被聞請俱ニ調印致被呉候ニ付則御役
 場へ御願申上候処神妙之儀ト早速御
 聴届ニ相成御旧藩中壺村ニ御立置
 戸籍並ニ地所画図面等も当村与リ
 認メ指上候一村立ニ罷在候間今般御
 一新之御時節伊勢堺辺遠之小
 村ニ而御手数奉懸候儀甚タ奉恐入
 候得共従前之通り御引立一村立
 被成下前書御年貢も上納仕来り開發
 之田畑並ニ葑畑等茂即今面々所持仕居候儀
 ニ付何卒此上御県庁様之御慈悲

ヲ以テ前書之地券当村へ御下渡し
被成下候様与も御県庁様御定法通り
上納可仕候万一今般地券御下渡しニ
相洩候而者数百年奉蒙御国恩候故ト
ハ乍申極山中之困苦ヲ凌キ小村た
り共一同相励ミ互に助合候而今時迄
一村立相続仕数十代之苦心一時ニ
空敷相成候儀ハ村中者共一死にも
難替嘆ハケ敷次第与指廻シニ付此段
御嘆願奉申上候何卒数百年之苦心
今時一村之情実深く御憐察被成下
別段之御憐愍ヲ以願之通り御聞上ケ
被成下候得バ村中一汙誠ニ以難有仕合
ニ奉存候依之以書付御嘆願奉申上候已上

⑮

明治五壬申九月廿八日

右村戸長

石井勝太郎

副戸長

小椋 儀平

犬 上 県

御 庁

右之通り願面相認メ同廿八日出訴仕候
処御庁願面披見之上御尋ね可其

村方之儀ハ下六ヶ村の山番として往古
 遣し置候由申立居り候間此儀如何与
 申聞候乍恐奉申上候私シ共村方之儀ハ
 往古鉾山業ヲ致し居り其節鉾山師
 運上与して出高ニ応じ定納仕流水
 三里幅貳拾町之間御運上地与相成
 勿論其領の節ニて何村之地所と相
 相定りも無之御定納仕居り候地所与
 罷在候所私シ共村方其後追々貧窮
 仕候折柄自然ニ立入郷中之枝村ト唱候儀ハ
 全く空意に無之候尚又何ツ頃与り分出
 し候与申証拠御上程ヲ始メ郷中ニ而も
 慥成る古記書有之候へ者私シ共一応拝
 見仕度候左様之儀ハ無之筈之事ト
 存居り候与奉答候次ニ御尋ね
 左候ヘバ何之頃与り其村方初り何国
 与り来る之御尋ね有之乍恐奉申上候
 私シ共村方之儀ハ惟喬親王已前
 住居ハ何村ヨリ来ル共相知れ不申候尤
 古記事も有之候得共度々火災も有之
 消失致し候間其儀ハ耽与相分り不申
 候ト奉答候被仰渡候儀ハ尤モ願面之趣
 相分り候ニ付付属之向ハ御免ニ相成候へ共
 画図面之儀ハ郷中一汙打寄り相認メ
 其村方之境界速ニ相立指出すべき
 旨被仰渡候ニ付帰村仕甚タ心配仕居り
 候折柄犬上県御廃止ニ而滋賀県

江合併ト相成候其後地券取調ニ付管
 下一沔同十月廿五日御呼出シニ相成
 区内一沔出庁致シ大津西川江矢島屋
 市平方ニ而止宿当日県庁ニ於テ県令
 松田道之殿与リ地券渡方規則被仰
 渡承知仕候就而ハ当村ヨリ犬上県江
 御嘆願之次第滋賀県江御廻シニ相
 成尚又地券掛リ田村保満右県江付
 廻リ尤郷惣代者勿論之事当村嘆
 願之趣滋賀県令松田道之殿江一々
 詳細申上被成候ニ付区両長江被申付
 候儀ハ七ヶ村合併ニ相成候歟又ハ茨茶屋
 別村に相願候歟又別村相立候得者
 右村相続致様領地相定メ相立可申候
 尚又彼は故障申立ルニ於テ入会山
 御取上ゲ之上県庁ニ於テ之ヲ取計
 置何れ成共下付可申候否哉返答ニ
 ニ及ふへき旨申被付郷中一沔当惑仕
 彼是与相談致し被居候尚又当村をも
 可被出被仰渡之儀ハ此度境界之处者
 郷中一沔熟談之上相定メ別村願五人
 一紙連印之上画図面相添指出すべ
 き尚又此儀熟談行届不申而ハ郷中
 合併申被付候趣尤モ郷中江茂申渡置
 候ニ付区長方へ右之趣ヲ以掛合仕候处右
 区長与リ申被聞候儀右之趣私シ共江も
 御達シニ相成候間郷中役人共被申候ニハ

(17)

(18)

此度滋賀県管轄ト相成候御請ニ参リ
候儀と相心得候ニ付誠ニ案外之事程
何共勘考相付不申候間何れ量取計ニも
相成不申彼はト評定致シ被置候得共其場ニ而
画図認メ境界相立候儀も難相成ニ付一先帰
村之上急速何角も取調べ境界相立其上御伺
可申与郷中一汙申被上候処県庁ヨリ被仰渡ニハ
婦村次第熟談致し茨川茶屋一村相続可
仕候様急度境界相建分村願共可仕様答書
可差出旨申被付御請書一紙連印ニ而奉差上置
同十月晦日婦村致し右之趣村中一汙江披露
致し候処村中一汙之者申立候ニハ先達而犬上県
廃止ニ而滋賀県へ合併ニ相成候節ハ是迄当村
願之通り如何相成候哉ト誠ニ心配仕居り候処此度首
尾之言語絶候難有之大悦至極与一汙悦入与り早速
郷中村々江相廻り急々境界分明相成様催促
に参り指扣江居り候処何之沙汰も無之ニ付十一月
十四日ニ右之由伺旁彦根表江罷出伺中之
処地券掛今奉承知候岸喜平殿与りハ十八日
迄ニ熟談仕境界相立可申段指紙相被
廻候ニ付十七日夕方当村へ罷被越人名左ニ印
九居瀬村役人小椋金三郎外壺人
黄和田村役人布施作左衛門上出喜三郎
政所村役人植田源三郎外壺人ハ河井新五郎
箕川村役人代山田喜平阿野竹松
蛭谷村役人小椋建造小椋才平
君ヶ畑村役人辻常八

計員拾四名筒井利三郎方止宿仕候
兼而当村之儀ハ歎願通り絵図面相認メ
流水三里幅貳拾町之間境界之心組ニ而決
定致居リ候ニ付田地並ニ願済之地所共記載
致し置郷中役人前へ指出シ候処莫太
之場所故郷中之者餌れ果て該翌日郷
中役人地所見分迎上ミ下も手分致し
見廻りしが郷中役人申聞けら連候ニハ
今日見分致し候場ハ広大之地所夫々上ミ
下モ川筋段岸ニ開発致し外々迄地所
場所有之如何当村之境界相立候哉ト
尋問被致候ニ付当村与リ申答候儀ハ兼而
郷中ニも御存之通り流水三里之間是迄
手広く相稼居リ候へ共夫れニ而茂難渋
仕居リ候訳柄ニ御座候処尚又今日御覽之
通り上ミ下もニ開発所又ハ開き残り之
御免地も有之候間此度御県庁様分
被仰渡ニハ地所境界混淆不致様境
界相立申べく様被仰渡も有之ニ付
際限之儀ハ谷とか尾とか道川とか判然
明瞭なる所を以テ境界相建申べく様
被仰渡も有之ニ付郷中役人衆之御賢
考ヲ以テ当村往々相続ニ相成候様境
界相定メ可被下与申答候節郷中
役人之中にて申被聞候ニハ当村ヨリ申
被聞候儀ヲ以テ境界相立メ候へハ此立会
山上等を引抜き上ミ下モの端ニ許リニ

⑳

候間左候得バ村々々難洪者共稼ニ参リ
候而モ格別之場所も無之誠ニ辺部之
処而已ニテ甚ダ難洪ニ及び候忤ト申
被聞尚又君ヶ畑村之儀ハ田畑村廻り而已
少々宛の際限究メ度心組に候へ共其又中
にわ右之場所を金高に積リ当村売払
致し度者茂有之候へ共右ニ而ハ此度の御趣意
に忤リ候ニ付其場ニ而切羽切出すものも無
之以前之内談ニては居候内々黄和田むら
布施作左衛門まん処むら上田源三郎右
兩人ヨリ被申聞候二者字何と申所与リ処
何と申何谷迄境界申儀承リ不申而ハ
相談相對不申ニ付其儀承リ度与被申
ニ付不取敢当村与リ申聞候にわ上ミ西の
方ハ土倉西下も尾限り東奥表大山谷の上
ミの尾根限り川下モ西の方ハ馬の谷下モノ尾
限り東の方ハ太夫谷下モノ尾根限り与兼而
絵図面を以差図致候処郷中役人
申被聞二者成程絵図ニ而拝見致候へバ
夫々其ヶ所ニ開地も有之候得共尤モ之事
と存候へ共乍併夫レ丈へ之境界相立
候へ者当村茂充分之事ト存じ候故左
之儀者少々之出金も被致候歟被申聞
ニ付当村与リ申聞候ニハ兼而御存しの貧村
ニ而格別之出金も得不仕候へ共相成丈
ヶハ出金も可仕与申答候得ハ其言ニ
まとい眼色相見へ其翌日ニ至郷中

②1

役人申けるニ伊勢谷を除き其上ミ下モ
 六丁許り川端も境界等相定メ候由被申聞
 候ニ付当村与り申答候ニハ飛々の際限ニ
 而は往々論所の基亦ハ田地畑之辺入会
 地ト致し被置候而ハ往々村中不相続等存
 候間何卒其初申立之通りニ相定メ被下度
 段申答候処良もすれば当村中江之
 通り相成哉与君ヶ畑むら役人相心得右村役
 人申被聞候ニハ此度茨茶屋村与り申被立
 候通り地所之境界相究候而ハ君ヶ畑むら
 小前之者難決即今○仕儀ニ候間一
 先君ヶ畑むら迄御引取壺席相連被下候へハ
 難決者江も得心為致申度其上相定メ
 被下候様ト退尻溝候ニ付当村与り申聞候
 候二者折格ト御苦勞ニ相成兩三日も寄席
 を相建此俣ニ而絵図面も清書不致
 歸村被成候而ハ県庁之被仰渡を悖り勿論
 滋賀県江答書被差出候儀を失ひし
 道理と相心得尚又当村迷惑ニ奉存候間
 否トも境界相定め可被下と申答候へハ是悲
 ニ君ヶ畑迄引取被下扨ト押而被歎候ニ付蛭谷
 むら健造殿与り被申候ニハ偕テ此度之儀ハ
 不承知ニ候間且又郷中村々儀君ヶ畑之申
 口ニ馴染居り候而者甚ダ難決可仕儀与相
 心得候間下モ五ヶ村者面々心組之通り
 申置歸村可致が可然与被申候ニ付其任意
 政所村上田源三郎被申聞候ニハ此度茨茶屋

②②

②③

与り申立之境界場所代金五百円ト相定メ
四百円ハ当村の境界之分と相建百円
之処当村与り出金被致候へハ下モ五ヶ村之
儀ハ当村申立之通り境界熟談調議仕
候与被申聞面々村々戸長の名前書入其俣
婦村被致候其翌日早朝与り利三郎龍藏右
兩名当村集会之趣太田市百方へ通達
致し右境界相定メ被下候ニ付当村与り百
円金急度出金可仕候間此段返答ニ及ビ
置其日婦村仕罷在処其引続き地券成
功之取調べとして今在家村岸善平殿高
野村へ出張呼出ニ相成候ニ付九居瀬村揃ひ
九居瀬村ニ而両区長之者申被聞候ニハ此度
茨茶や村境界相定メ候へハ年々郷中
小物成上納致居り候ト〇〇七ツ割ニ而
定納可致段被申聞候ニ付当村の申聞候ニハ
其儀ハ追而御県庁与り御規則之通
り税金被相定候ト相心得候間如何様共県
庁之被仰渡次第否哉申間敷候与申答
夫ヨリ高野村へ罷越候処地券成功之
日限目的相立御請書指出尚又其
節地券掛与り申被渡候儀ハ六ヶ村与
茨川茶屋之境界引分の儀迅速相
定メ可申段申被付一汙之者九居瀬村ニ而
集会仕候処君ヶ畑村与り小前之者拾四
五人も罷出毎々難渋を申立候儀者此度
茨茶屋与り境界申立之内下モ西ノ方桧

原谷上ミノ尾限り東の方ハ焼尾谷下モノ尾
 リニ境界相立不被下而ハ小前之者共難渋仕
 候抔ト歎きと頼ミ込候ヘ共郷中役人儀も
 何共返答ニ不及九居瀬村ニ而埒済され不
 申候段政所むらニ而集会仕候ニ付両長之モノ
 を君ヶ畑与リ取込ミ被置候故両長之者
 申被聴候ニハ此度其村方境界之儀広太
 之事ニ候間何卒君ヶ畑村願之通りニ而聞
 済致し可呉様君ヶ畑村同様之儀申被聞
 候ニ付当村申聞候ニハ最初下モ五ヶ村与熟
 談調議仕候与ハ多分相違ニ候間其儀ハ
 承服難相成趣申答候処両区長被申候ニ
 ハ右之通り境界を縮メ聞済ニ相成候ヘバ
 百円之内三拾円扣ヘ七拾円ニ而熟談
 済ニいたし候与被申候ニ付当村も両区長
 之顔ニ免じ然ハ鞍骨谷限り太夫谷限り
 ニ而承服可仕与申答候処何分君ヶ畑村
 太夫谷望ミ段々と当村ヲ頼ミ候得共
 養水掛リニ而大切成場所ニ候得ハ行末場
 普請等の節彼是と口論出来候も難
 計ニ付其儀者聞入不申と申答候処両長
 被申候ニハ左候ヘハ養水口与リ谷口迄其村
 方江売渡し可申与被申聞其分ニ而熟
 談済ニ致し候ニ付規定書相認七ヶ村
 連署ニ而両区長江差出し其引続郷中
 一戸境界際限分け并太夫谷湯の下も直
 段調江して罷越君ヶ畑村ニ而絵図認メ

(25)

際限相立事済可仕与下も五ヶ村ハ其心組
 ニ而君ヶ畑村江集合仕候処君ヶ畑村与リ
 被申候ニハ絵図面ヲ認メ境界分ケ可仕儀
 猶以一大事ノ事ニ候間一応見分之上絵
 図面を相認メ可申バ可然ト申被聞候ニ付
 其保当村江罷越前件約定之際限
 相改メ共申す口相立不申最も際限
 相定メ画図面認メ可申場ニ至候へ共又
 候君ヶ畑迄指扣君ヶ畑村ニ而画図
 相認メ区長江差出候処郷中与リ被聴
 申候ニハ右絵図面之通り茨茶屋村境界
 相立候上ハ其外上ミ下モハ六カ村立会ニ而
 其村者入会相成不申忤ト申被聞候ニ付
 当村与リ申立候ニハ麦野河内壺山立会
 山与有之処此度当村境界相定メ候ニ
 付而其余上ミ下モ茨茶屋村相除き
 候儀ハ如何之訳を以テ相除き候哉ト申答
 候処郷中役人被申聞候ニハ此度相認メ候画
 図面ニ上ミ下モ六ヶ村立会与御座候ニ付左候へハ
 其村方相除キ候共不苦候由申被聞候ニ付取不敢
 当村ヨリ申聞候ニハ從來右之山地ハ当村を元
 ニ致し六カ村立会与相唱へ居リ候ニ付其儀ニ頓
 着仕不申当村境界之外上ミ下モ是迄の
 通り六カ村立会与承知仕候仕与申答候処
 郷中役人心組違案外之事故君ヶ畑村
 を引取り其翌日政所村ニ而集会被致
 郷中役人申被聞候ニハ其村方境界之外

②6

②7

迄是迄通り立会杯ト申被募候へハ是迄
 之約定悉皆反古ニ致ス杯ト強情申立
 候ニ付当村与リ申聞候儀ハ当村往々
 相続難相成儀者何国迄も承知得不仕
 候間右之趣区長へ届出其上県庁へ伺
 可出旨申答候其俣急速区長へ届出候処
 両区長与リ被聞申候儀ハ是迄段々熟談
 致し是迄ニ熟議相成候儀謬か其村方境
 界之外上ミ下も是迄之通り立会杯ト被
 申候儀ハ余リ充分勝手俣事故左候得ハ
 区長迎も如何計ひ方も無之ニ付是迄
 之熟談反古ニ致し候間此儀県庁へ
 差出スヘクニ付勝手ニ可被致杯ト郷中
 同様之言語被申聞候ニ付取不敢当村
 与リ申答候儀ハ扱又是迄熟談致シ画
 図面認メ村々役人熟談之上請書迄も差
 上置候上当村境界外上ミ下モ是迄通り
 立会ト申上儀ニ而是迄之規定反古ニ相
 成候へハ如何が成共可被成候私シ共儀ハ右始末
 柄之手續ヲ以テ々々県庁へ可伺出旨申
 答候処両区長申被聞候ニハ暫時猶予
 致可呉様被申聞候ニ付郷寄宿元江差
 扣居リ候処両区長郷中役人被召寄
 右之趣申談じ之上私シ其呼寄被申聞
 候ニハ其村方境界之上ミ丈ケ七ケ畑立
 会と相定メ下モノ所ハ六カ村立会ト相定
 候様郷中江も申渡し候間右ニ而熟談

②8

調議可仕様申被渡候ニ付当村与リ申答
候ニハ左候ヘハ冥加金百円ニ詰ミ可差出候間
太夫谷の谷限リト相定メ夫ヨリ下モ六ケ村
立会奥ハ七ケ村立会ト相定メ可被成下旨
申答候則チ右ニ而双方熟談調議仕其
翌日取為替証文認メ取替書左ニ記す

境界取替一札之事

右者從來六ケ畑立会山之内元禄年
曆ヨリ茨茶屋之儀追々新開発被致
候ニ付而ハ右村境界無之候処今般
御県庁様ヨリ右村一村之境界
相定メ可申様被仰出承知奉畏
候此度其村方与下郷六ケ村熟談
之上右立会山之内境界者川下モ南
の方ハ太夫谷ノ谷境ヘ北ハ鞍骨之上ミノ
尾境川上之儀善右衛門谷の上ミノ尾
堺北ハ土倉下ノ尾堺ト相定メ最モ其
御村方持地与相定メ候分広太之山地ニ付
下郷ヘ百円出金申請候右境界之内
永世御支配可被成候乍併奥堺善
右衛門谷上ミ尾堺字土倉谷下ノ尾堺
奥者雨落有限リ茨茶屋与六カ
村都合七カ村の立会ト相定メ川下モ
堺南ハ字太夫谷与リ下モハ政所村山堺清
水谷下モノ尾堺迄北ハ鞍骨上ミノ尾堺

与リ下モ政所山堺鷹落下モ尾迄六
カ村立会与相定メ申候件之通り境界相
定メ申候上ハ今後決而双方其他の地へ
立入申間敷候依而之ニ一紙連署取
替一札如件

③⑩

明治五壬申十一月廿九日

愛知郡	九居瀬村	召出
	黄和田村	〃
	政所 村	〃
	箕ノ川村	〃
	蛭谷 村	〃
	君ヶ畑村	〃

同郡茨川茶屋村

正副戸長衆中

右之通り聊相違無之候以上

箕ノ川村
区長
谷田一平印
副区長
吉村友次郎印

冥加金百円之内貳拾円相渡し残金
ハ来ル一月中ニ皆金可仕与約定致し来リ
明治六酉一月一日与リ出庁可致し相定メ帰
村仕候弥々一月一日郷中打揃へ彦根表へ
罷越郷宿ニ而絵図面相認メ同三日彦

③⑪

根ヲ出立同四日滋賀県庁へ着致し

一 汙熟談済之答書并ニ分村願書

相添上申仕御聞済之上首尾

能帰村仕候

右境界ニ付対談有増之道行

記し置べきものなり

但シ境界約定書左ニ記ス

境界約定為取替一札事

一 麦野河内山境界

東ハ 伊勢国尾堺

四至 西ハ 君ヶ畑村蛭谷村箕ノ川村

立会山尾堺

北ハ 字善右衛門谷上ミノ尾界

字土倉谷下モノ尾界

川上ハ六ヶ村ト茨茶屋与

都合七ヶ村トノ立会山与

定申候

南ハ 字太夫谷境

鞍骨谷上ミノ尾堺

川下 右堺ヨリ政所村堺

清水谷下モ尾堺

鷹落尾堺迄政所

村九居瀬村黄和田村

蛭谷村君ヶ畑村右

六カ村立会山定申候

右者従来九居瀬村黄和田村政所村

箕ノ川村蛭谷村君ヶ畑村六カ村立
会山之内谷間ニ元禄年曆ヨリ茨
川茶屋追々新開発有之候ニ付
今般地券御改正ニ付御県庁
与リ右茨川茶屋与六カ村トノ境
界無之ニ付右地所境界相定メ
申談被仰渡一汙承知奉畏双方
熟談之上前件之通り境界相
定メ可申候最も茨川茶屋之儀ハ
広太之山申候ニ付為冥加金
六ヶ村江金百円出金仕候然ル上
者向後各持地之外他之山江
屹度立入申間敷候倚而一札
依而如件

③③

明治六癸酉一月四日

九居瀬村

戸長

小杉栄三郎印

副長

小杉兵五郎印

黄和田村

戸長

野神 喜平印

副長

森 友吉印

政所村

戸長

上田源三郎印

箕ノ川村

戸長

谷田 新蔵印

副長

山田 喜平印

③4

蛭谷村

戸長

小椋 健蔵印

君ヶ畑村

戸長

瀬戸 新七印

副長

小椋 文平印

茨茶屋村

戸長

石井勝太郎印

副長

小椋 儀平印

前書之通り為取替証相違無之

ニ付奥印致候

第壱区

総代戸長

吉田 市平印

副惣代戸長

吉村友次郎印

以書付ヲ奉御願申上候

③⑤

愛知郡第一区茨茶屋新田

右私シ共村方之儀ハ六ヶ村立会山谷間ニ元
禄年曆ヨリ開發有之境界相分リ無之
今以テ御高等も御取究無御座然ル処
今般地券御取調ニ付当村境界相建可
申旨被仰渡候就而ハ茨川茶屋儀遠隔之
地ニ御座候間向後一村立ニ相成候様奉願
上候此段以書付御願奉申上候以上

明治六年一月九日

右村

戸長

石井勝太郎

副戸長

小椋 儀平

副総戸長

吉村友次郎

総戸長

谷田 市平

滋賀県令松田道之殿

愛知郡第壹区

③⑥

茨川茶屋

其村名内務省江伺之上

自今茨川村与改称候事

資 料

明治七年五月廿七日

滋賀県令松田道之印

* 翻刻にあたり、橋本誠一氏（静岡大学名誉教授・日本法制史）にご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。